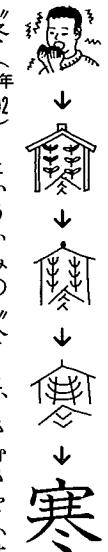


# 寒

三年 筆順 画数  
オン カン 12  
ワシ さむ い



成り立ち

使い方  
熟語例

△寒い冬が来ると、池には氷がはって、雪がちらつきはじめます。家の中では、寒さをおいはらうために、暖房がたかれます。

△内陸では寒暑の差がはげしいものです。夏は非常に暑く、冬は厳寒になります。

「冬（年202）」といいういみの「𠂇」と、さむさをふせぐための「ほし草」をあらわした「ヰ」と、家のいみをあらわした「ヰ」とを組み合わせて作った字です。

「家中にほし草をいっぱいついんで、冬の「さむさ」にそなえること」をあらわした字です。むかしは、だんばうのせつびなどありませんでしたから、たいようねつをたくわえたほし草で「さむさ」をふせぎました。

「さびしいこと」「まずしいこと」のいみにもつかわれます。

例寒村。

また、「心がぞつとすること」のいみにもつかわれます。

例寒心。

**感**

三年 画数 13  
筆順  
オン カン  
ワシ

后 感 感 感

成り立ち



まさかりの形をあらわした「ヰ」と「口」とを組み合させて、「まさかりをうちおろすときに出す『かけ声』」をあらわした「ヰ」に、「心」をくわえて作った字です。

「思わず大きな声が出るほど、『心をうごかす』」ことをあらわした字です。「ひどく心をうごかす」ことをあらわした字です。

「今の『まさかり』は『鉞』と書く。『針・釣』などと同様にあとから『金』を加えたものである。鉞は斧の大型のものである。」

使い方

△むかしの「からくり」を見て、感心しました。「からくり」は、今のおもちゃなどの、しかけに当たります。

いろいろなくふうがされていて、おもしろく、本当に感心しました。

△わたしは、本を読んで、感動すると、なみだが出て来ます。このあいだも、『ごんぎつね』という本を読んで、

ごんが兵十にてつぱうでうたれたところで、ないしてしまいました。

熟語例

△感心（心に、いいなと感じること。また、ほめるべきだと感じること。）

△感動（なにかにはげしく感じて、心を動かすこと。ふ

かく心をゆすられること。）

△感想（なにかについて、心に感じたり思つたりしたこと。「作文に、本を読んだ感想文を書きました」などというふうに、つかいます。）

△同感（同じことを感じること。考え方と同じなこと。「きみのいうことに、ぼくも同感だ」などというふうに、つかいます。）